

初対面接触場面における自発的自己開示と相手からの質問による自己開示：韓国人日本語学習者と日本語母語話者の会話データから

| | |
|------|---|
| 著者 | 呉 ？榮 |
| 著者別名 | OH Hyunyoung |
| 雑誌名 | 筑波応用言語学研究 |
| 巻 | 24 |
| ページ | 39-51 |
| 発行年 | 2017-12-20 |
| URL | http://hdl.handle.net/2241/00150193 |

初対面接触場面における自発的自己開示と相手からの質問による自己開示

— 韓国人日本語学習者と日本語母語話者の会話データから —

吳 暉榮

キーワード：自己開示、接触場面、韓国人日本語学習者、自発的自己開示、相手からの質問による自己開示

1. 研究背景

日常生活では、相手とコミュニケーションを取る時、互いの経験、感情、考えなど様々な情報をやり取りする。特に初対面の相手とは互いの情報がないため、相手の情報を聞いたり話したりすることによって、相互の情報のやり取りが増えると考えられる。この際、相手に、言語を介して自己について伝達することを自己開示と言う。相手と親密¹になる過程で自己開示を行うことは必要不可欠である。しかし、不適切な自己開示は相手に否定的な印象を与える(全 2010b)そして、相手からの自己開示は、受け手にとって社会的報酬の意味を持ち、受け手はもらった自己開示と同等の自己開示を開示者に対して返さなければならない(深田 1998: 88)。よって、開示する内容のみならずその量によっても否定的な印象を与える可能性もある。全(2010a)では、実際の会話データを元に、韓国人日本語学習者を対象に自己開示の出現頻度を明らかにしている。その結果、韓国人日本語学習者は日本語母語話者より自己開示量が多いと指摘されている。しかし、出現した自己開示は自発的に行われたか、相手に聞かれて行われたかまでは把握できていない。熊野(2002)は、相手に尋ねられると、自己開示の抵抗感は低くなり、自己開示をしやすくなると指摘している。このように、実際の会話において自発的か相手に聞かれて開示したかによって開示の性質²が異なる可能性も考えられる。また、西田(1998)は、自己開示は親しい関係か初対面の間柄かで開示の

¹ 自己開示の機能は対人コミュニケーションでは重要な役割を果たしている(小川 2000)。そして、自己開示は二者間の親密度が適切な水準に保たれるように調整する、親密感調整機能をもっている(深田 1998: 89)。

² 自己開示の開示状況が自発的な場合と相手に聞かれて開示した場合は開示の性質が異なると考えられる。榎本(1997: 168)は、初対面の人との個人的な自己開示が一定のレベルを超えると、それはお互いの現在の関係から予期されるものを大きく上まわり、開示者に対する不信感が生ずると指摘している。しかし、会話では聞かれて開示する場合もあり開示状況によって必ずしも開示者に対する不信感を生ずる状況が起こるとは仮定できない。

内容が大きく異なり、出会って間もない段階では表面的内容である客観的内容を主に開示し、時間の経過とともに感情、意見などの主観的内容が多く現れると指摘している。従って、初対面の者同士の間で主観的内容が多く現れると対話者間で一定の距離が保てない可能性があり、その内容が客観的情報か主観的情報か内容の深さによっても異なるであろう。

従来の研究では、質問紙による自己開示の研究が多くなされて来たが、実際の会話は相手との相互行為の中で変わるものであり、自己開示の開示状況までは把握できない。よって、本研究では韓国人日本語学習者と日本語母語話者を対象に、実際の会話データを元に、開示状況による自己開示の量の差と開示状況による自己開示の内容の差を検討する。

2. 先行研究

自己開示の研究には、大きく質問紙調査と実際の会話データを対象にした研究がある。多くの研究は質問紙による量的研究で、質問紙調査の結果から自己開示のパーソナリティ特性の検討を始め、1970年代には自己開示に影響を与える状況的要因の研究が行われて来た(榎本 1997: 92)。その後、言葉と環境が異なる文化の人との対話場面における社会文化的要因と自己開示の関係を解明するための研究が始まった(Chen 1995, 西田 1998)。

多くの研究から自己開示における異文化間の差が明らかになった(全 2010b, 豊前他 1990)。自己開示の研究は開示の量、開示動機など文化背景が異なるもの同士の差を様々な角度から対象としてきた。その中で、自己開示の量と関連させて質問紙調査を行った先行研究には、加藤他(2006)と内藤(2011)が挙げられる。

加藤他(2006)では、自己開示の返報性³と感情的側面の関連性を、電子掲示板の投稿に対する返信から分析している。その結果、文の形式が書き言葉か、話し言葉かによって自己開示の量の返報性に差を認めている。そして、深い自己開示⁴の投稿に対して、返信において自己開示の量が増えるという結果が見られた。特に、深い自己開示を含んだ投稿に対して、ポジティブに感じる傾向が見られることが明らかになった。内藤(2011)では、親密さの要因としての対人魅力を自己開示及び非言語行動から分析している。その結果、自己開示の総量が多い場合、会話者間の相互性が高い場合、相手に同程度の開示を返報する場合、好まれることが明らかになった。そして、初対面の間では非内的話に返報性が存在し、親しい間柄では内的話に徐々に返報することが明らかになった。

次に、会話データを分析した小川(2000)では、初対面場面における2者間の発話量のつりあいと会話者が会話にもつ印象との関係について調査している。その結果、お互いに同

³ 相手が表面的な自己開示するとこちらも表面的な自己開示をし、相手が内面的な自己開示をするとこちらも内面的な自己開示をしようとする。自己開示の内面性のレベルに応じて自分も自己開示をしようとする傾向のことを自己開示の返報性あるいは相互性と呼ぶ(榎本 1997: 93)。

⁴ 加藤他(2006)では、過去に経験した事実に加え、その時に感じた感情を含む自己開示を、「深い自己開示」と定義している。

程度の開示を行ったり、同じくらい質問をし合うと、相手に対して好印象を抱くことが明らかになった。

これらの先行研究は、自己開示の返報性、内容の深さと対話者が感じる印象には関連があることを明らかにした点では高く評価できる。しかし、質問紙による結果は実際の会話と異なる可能性もあり、自己開示を自発的にしたか、相手の質問によってしたか開示する状況によっても異なることが考えられる。小川（2002）では、会話中の返報的な発話から生じる2者間の発話の均等性が、2者間の関係において重要な役割を持つと指摘している。そこで、実際の会話データから発話量の差を検討する必要がある。そして、自己開示をした開示の発話量だけではなく、開示内容の社会的望ましさが対人魅力に影響する（中村 1990）ことから、自己開示の内容も視野に入れて検討する必要があると考えられる。自己開示の内容は、初対面の会話では親しい間柄の会話と異なり、会話の時間帯により身上調査的内容の客観的内容から意見、心情の主観的内容の開示が多くなる結果（奥山 2005）を参考に、自己開示の内容の深さを2つに分けて分析する。最後に、熊野（2002）では、自ら進み自己開示をする場合は、感情的に抑えつけられずに開示し、相手から尋ねられて開示する場合は、尋ねられたという状況に合わせようという規範的な気持ちから開示すると指摘している。このように、開示する状況によって、開示の動機は異なっているため、開示状況をわけた上で、自己開示の量と内容の分析をする必要がある。

相手との文化の差による誤解を起こさないためには自文化との相違点や類似点を明らかにすることが重要である。日本人同士と異文化の関係同士では要因間の関係が異なる可能性があり、親密な対人関係形成において考え方のズレが生じ、接触場面で誤解が生まれる可能性が考えられる。そのため、文化差を検討する必要があると考えられる。しかしながら、管見の限り、実際の会話から異文化間の会話における開示の状況及び、内容の深さによる自己開示の量については検討されていない。文化の分析は言語の分析を手掛かりにする（井出 1998）ことから、異文化間会話及び母語話者同士の会話を研究することは、有意義だと考えられる。

上記の内容を踏まえ、本研究では韓国人日本語学習者と日本語母語話者の初対面同士による自己開示の特徴を、開示の状況及び内容の深さから検討し、自己開示の量の差を明らかにすることを目的とする。さらに、以下の3点を研究課題とする。

課題（1）韓国人日本語学習者と日本語母語話者の自発的自己開示と相手の質問による自己開示の量の差を明らかにする。

課題（2）韓国人日本語学習者と日本語母語話者の自己開示の内容の深さごとに見た自発的自己開示と質問による自己開示の量の差を明らかにする。

課題（3）接触場面及び母語場面の自発的自己開示と質問による自己開示の量の差を明らかにする。

⁵ 3.4節で詳しく述べる。

これらの研究課題を通して、韓国人日本語学習者と日本語母語話者の相違点及び類似点を明らかにし、同文化の人と異文化の人との会話場面において、どのように異なるかを明らかにしたい。そして、その特徴を明らかにすることで、開示状況による返報性の差とどのような開示状況で自己開示の内容に差があるのかという点も検討できると考える。

3. 研究方法

本節では、まず調査協力者の属性と会話収集の手順を述べ、自己開示における「自己」の定義を示す。

3.1 調査協力者

本研究では初対面の会話場면을収録し、母語場面及び接触場面における自己開示の発話を分析対象とした。母語場面と接触場면을比較するため、1人当たり2回、会話録音に参加してもらった。1人の話者が母語場面の時と接触場面の時にどのような変化があるのか考察するため、日本語母語話者2名と韓国人日本語学習者2名、合計4人を1つの構成とした。具体的には、日本語母語話者対日本語母語話者(4ペア)、韓国人日本語学習者対韓国人日本語学習者(4ペア)、接触場面8組、合計16ペアである。日本人の平均年齢は24才、韓国人日本語学習者の平均年齢は26才である。KJの日本滞在歴平均は4年で、上級者を対象とした。その理由としては、日本語の誤りで会話の流れに支障を起こさないためである。自己開示は、相手が異性か同性かで影響を受ける可能性があるため、全て女性を対象とした。

3.2 会話収録手順

調査は、2015年5月に会話録音室で行った。会話録音室は、屋内の静かな会話録音室で実施した。話題は自由で、会話は1ペア当たり合計20分行った。会話を始める前、筆者が同席して収録の流れを説明し、退出した。会話の録音時にicレコーダー2台を用意し録音した。会話収録の前、協力者に今後も付き合いがあることを前提に会話をしてもらうよう指示した。会話開始20分後に筆者が会話時間の終了を知らせ、終了とした。詳しい組み合わせは以下の通りである。

【表1】会話協力者の組み合わせ

| | 日本語母語場面 | | 接触場面 | | 韓国語母語場面 | |
|---|---------|----|------|-----|---------|-----|
| | J1 | J2 | J1 | KJ1 | KJ1 | KJ2 |
| 1 | J1 | J2 | J1 | KJ1 | KJ1 | KJ2 |
| 2 | J3 | J4 | J2 | KJ2 | KJ3 | KJ4 |
| 3 | J5 | J6 | J3 | KJ3 | KJ5 | KJ6 |
| 4 | J7 | J8 | J4 | KJ4 | KJ7 | KJ8 |
| 5 | | | J5 | KJ5 | | |
| 6 | | | J6 | KJ6 | | |

| | | | | | | |
|---|--|--|----|-----|--|--|
| 7 | | | J7 | KJ7 | | |
| 8 | | | J8 | KJ8 | | |

3.3 自己開示単位と開示単位の認定

本研究では、自己開示の会話データを対象にした研究（全 2010b）を参考に「自己」を次のように定義する。「自己」の定義は、(1) 自分自身に関すること (2) 自分と関連している者と関係すること (3) 所属の一員としての自分のことである。以上の「自己」の定義を元に自己開示の出現頻度をカウントする。実際の会話では、1人の発話者が発話時に1回のみ開示をする場合もあるが、複数回開示が現れる可能性もあるため、出現ごとに区切りすべてを計算する。以下の例文は、上記の自己の定義を示すものである。例文、「/」は開示ごとに区切った分割線である。例文は、本研究の会話データから抜粋した。

- (1) 自分自身に関すること： 私は、<大学名>大学からきました / 交換留学生です⁶。
- (2) 自分と関連しているものと関係すること： 研究室の先輩方々はやさしいです。
- (3) 所属の一員としての自分のこと： うちの部活は器が大きいので。

3.4 自己開示内容分類基準

初対面の会話では、親しい間の会話と異なり、時間帯によって身上調査的内容の客観的内容から意見、心情の主観的内容の開示が多くなる結果（奥山 2005）を参考に、初対面場面の状況を考え、客観性と主観性を中心に考察していく。自己開示の発話だけを分析すると、その内容が身上調査的内容の客観的内容なのか主観的内容なのかまでは詳しく分析できない。従って本研究では、自己開示が出現した発話だけではなく、どのような内容で開示をしたか内容の深さにも焦点を当て分析する。内容の分類は、初対面の間に適していると考えられる Morton (1978) によって作られた分類を元に、全 (2010b) の研究を参考に分析した。全 (2010b) は、韓国語母語話者と日本語母語話者を対象に、実際の会話データから日韓の対照研究を行っている。韓国語母語話者と日本語母語話者を対象に初対面における自己開示の内容の特徴を明らかにした結果、韓国人日本語学習者の主観的内容の自己開示における言語表現の中には、日本語母語話者に見られない母語の影響があることが示唆された。本研究では、表現に焦点を当てた考察はしないが、全 (2010b) の結果から、内容の深さによって日韓の自己開示に差があることを参考に、自己開示の発話を 2 つの内容に分けて分析を行う。

内容による自己開示の分類のうち、記述的自己開示には客観的な内容を含む情報、事実、経験などがあり、評価的自己開示には主観的内容を含む感情、気持ち、感想、評価などがあ

⁶ 私は、「<大学名>大学からきました / 交換留学生です。」の発話から、どこの大学から来たかと今交換留学生をしている。という2つの情報が出現している。よって自己開示が2回出現したとカウントした。

る。それぞれ細分化されてはいるが、大きく 2 分類にまとめた。具体的内容の例は以下の通りである。表の例文は本研究の会話データから作成した。

【表 2】自己開示の内容分類

| | |
|---------|---|
| 記述的自己開示 | <ul style="list-style-type: none"> ・「学部名」学部の 4 年生です (J5 情報)。 ・あ、日本語は高校の時から母国で勉強していました。(KJ6 事実) ・私この間行ってきました。その「大学名」大学の海外研修があって (J6 経験) |
| 評価的自己開示 | <ul style="list-style-type: none"> ・日本に来て本当によかったです。(KJ1 感情) ・だから、怖いな就活 (J1 気持ち) ・ダメな精神がすごいねづいちゃって (J2 評価) |

4. 結果と考察

本節では、4.1 で自己開示の開示状況別の結果、4.2 では自己開示の内容の分類から見た結果、そして 4.3 で、開示量を場面⁷ごとに比較した結果を分析していく。

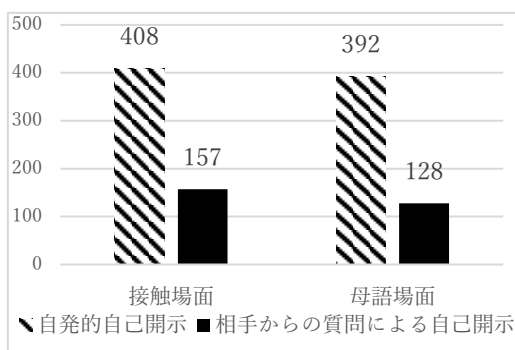
4.1 自己開示の開示状況別結果

まず、実際の会話データを分析するにあたって、人によって話す速度が異なること、聞く時間の方が多く人や話す時間の方が多く人などの偏りがあることを考慮し、総発話数⁸に対する自己開示の発話出現頻度とその割合を算出した。その結果、韓国人日本語学習者は、総発話数 11248 回、自己開示は 1085 回で総発話に対する自己開示の割合は 9.6% である。日本語母語話者は、総発話数 10376 回、自己開示は 813 回で総発話数に対する自己開示の割合は 7.8% である。全体における自己開示の出現は韓国人日本語学習者が日本語母語話者より多く現れていた。

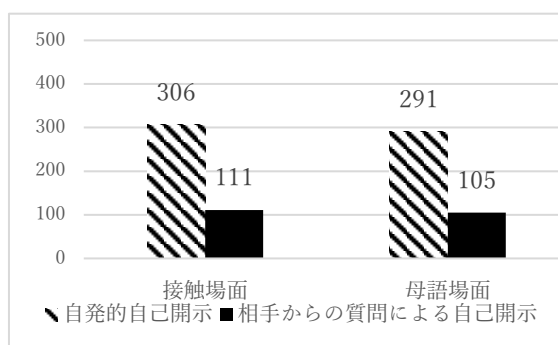
⁷ 本研究での場面は、接触場面及び母語場面を示す。

⁸ 日本語の場合は、総発話数を文節単位に区切って数えた。基本的に「文を実の言語としてできるだけ多く区切った最も短い一区切り」(橋本 1934) を参考に分析をした。韓国語の場合は、語節で区切って数えた。「机の/上に/バッグを/置いて/おく。」というこの例文は、5つの文節で成り立っている。語節は「文章を構成している各節。文章の最小単位であり、文節の間に放ち書きがそれに相当する」(標準国語大辞典 1999:4227 筆者訳) ものである。韓国語の文章を語節で分けると次のようになる。「책상 / 위에 / 가방을 / 놓아두다.」「机の/上に/ バッグを/置いて/おく」(筆者訳) この例文は 4つの文節に分けられている。日本語の訳は、上記の日本語の例文と同様の内容である。このように、日本語の文節と韓国語の語節の分け方は非常に類似しており、総発話数を区切る方法として最も適していると考えられる。発話文の認定の仕方は、基本的に文が成り立っている場合に 1 発話文として認定した。途中で述部を省略、或いは言い切らない場合、話者交替や内容などを考慮し、発話か否か判定した。

本節では、KJ と J の自己開示の発話に焦点を当て分析を行う。まず、自己開示の発話が自発的な開示によるか、相手に聞かれたことによって開示したか状況ごとに分けて検討する。次に、KJ と J の開示状況別に自己開示の内容を検討する。最後、接触場面と母語場面でのそれぞれの結果から考察を行う。以下、KJ と J の自己開示発話を開示状況別に分けた結果である。



【図 1】 KJ の開示状況別出現頻度



【図 2】 J の開示状況別出現頻度

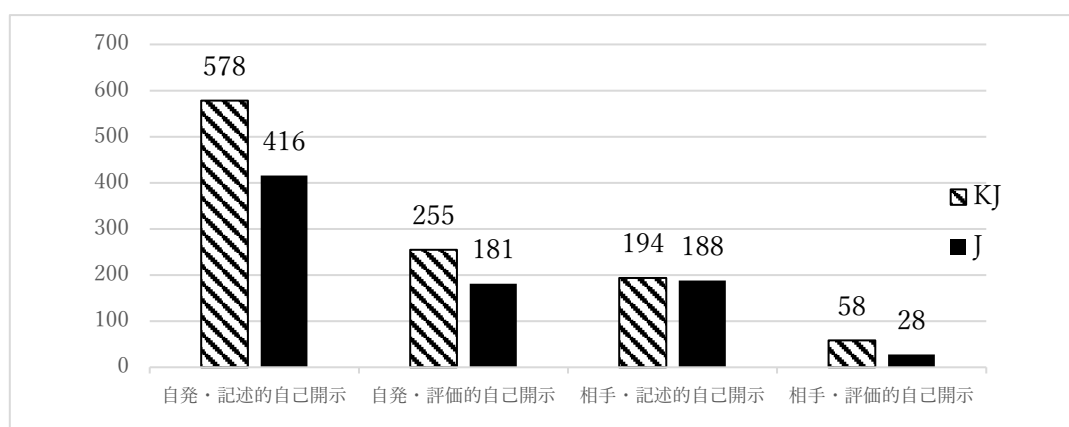
図 1 は、韓国人日本語学習者（以下 KJ）の結果である。KJ の結果からは、各場面ごとに、自発的の自己開示と相手からの質問による自己開示の対応のある t 検定を行ったところ、接触場面は ($t(7) = 6.11, p < .01$)、母語場面は ($t(7) = 5.65, p < .01$) という結果が得られた。よって、相手に聞かれて自己開示をするより、自発的に自己開示をする傾向が見られた。次に図 2 は日本語母語話者（以下 J）の結果である。J も KJ と同じく、接触場面は ($t(7) = 5.51, p < .01$)、母語場面は ($t(7) = 5.79, p < .01$) 相手に聞かれてする自己開示より自発的に自己開示をする傾向が見られた。開示状況別の結果から、KJ と J のどちらも自発的に自己開示をする傾向が見られた。次に、全体的な傾向を見るため、状況別に現れた KJ と J の自己開示出現頻度を比較した。そのため、KJ 対 J の自己開示の出現頻度を自発的の自己開示と、相手からの質問による自己開示をする 2 つの状況に分けて、対象に対応のない t 検定を行った。その結果、自発的の自己開示は KJ が J より多く、($t(9) = 2.05, p < .10$) と、有意傾向であった。その反面、相手からの質問による自己開示は、($t(14) = .50, n.s.$) で有意差が認められなかった。次に、場面の影響を見るため、KJ 対 J の接触場面での自発的の自己開示、母語場面での自発的の自己開示、そして、接触場面での相手の質問による自己開示、母語場面での相手の質問による自己開示についてそれぞれ、対応のない t 検定を行った。その結果、全ての項目⁹において有意傾向が見られなかった。この結果から、相手に聞かれて自己開示をするより、自発的に自己開示をすることは、接触場面か母語場面か場面の影響はないと思われる。

⁹ 自発的の自己開示と相手の質問による自己開示は、性質が違うため、全ての項目に対して t 検定を行っている。

KJ、Jも相手に聞かれて自己開示をするより、自発的に自己開示をする傾向があり、特にKJはJより自発的に自己開示をすると言えよう。全(2010b)は、韓国語母語話者は初対面の相手に熱心に自分のことを伝え、相手と自分の共感の部分を増やすことによって、相手との距離を埋めることで、相手と自分の一体感を求めようとする指摘している。KJも同様に、初対面の人に、自ら自分の話をする事で相手との距離を縮めようとすると考えられ、全(2010b)を裏付ける結果であった。

4.2 自己開示の内容別結果

本節では、自己開示の出現頻度だけではなく、どのような内容であるかを内容の深さという観点から客観的内容である記述的自己開示と、主観的内容である評価的自己開示で分けて分析した。まず、KJ、Jそれぞれの傾向を見るため、自発的自己開示をする場合の記述的自己開示と評価的自己開示、相手の質問による開示の場合の記述的自己開示と評価的自己開示の出現傾向を検討する。次に、KJ対Jの自発的に開示する場合と相手の質問による自己開示の場合、記述的自己開示と評価的自己開示どちらの内容が出現するか検討をする。最後に、全体的な傾向を見るため客観的内容の記述的自己開示と主観的内容の評価的自己開示は、どの開示状況で出現するかを検討する。出現頻度の結果を図3¹⁰に示す。



【図3】KJとJの内容分類による開示状況別結果

図3は、出現した自己開示を内容の深さによって分け、開示した状況別に表した結果である。まず、KJとJの自発的に自己開示をした場合に現れる記述的自己開示と評価的自己開示、相手からの質問による自己開示をした場合の記述的自己開示と評価的自己開示に対する対応のあるt検定を行った。その結果、KJが自発的に開示した場合の記述的自己開示

¹⁰ 図3は、左のグラフから順に、①自発的に自己開示をした場合の客観的内容の記述的自己開示②自発的に自己開示をした主観的内容である評価的自己開示③相手からの質問によって自己開示をした場合の客観的内容である記述的自己開示④相手からの質問によって自己開示をした主観的内容である評価的自己開示である。

($t(7) = 3.91, p < .10$) も、自発的に開示した場合の評価的自己開示 ($t(7) = 5.50, p < .10$) も、有意傾向である。同じく J も自発的に開示した場合の記述的自己開示 ($t(7) = 4.80, p < .10$) も評価的自己開示 ($t(7) = 3.62, p < .10$) も有意傾向であった。KJ、J どちらも、開示の状況に関係なく記述的自己開示が多く現れる傾向であった。

次に、開示状況と内容の深さによる差を見るため、KJ 対 J の項目ごとに¹¹対応のない t 検定を行った。4.1 節では自発的自己開示は KJ と J の間で有意傾向が見られ、自発的に開示された自己開示は、客観的内容である記述的自己開示も ($t(14) = 2.05, p < .10$) 主観的内容である評価的自己開示 ($t(14) = 2.05, p < .10$) どちらも有意傾向が見られた。初対面の間で主観的内容より客観的内容の情報を多く話すことは KJ も J も同じだが、内容の深さに関わらず相手に自発的に開示をする傾向があることは KJ の特徴と考えられる。そして、KJ 対 J の相手に質問されて開示した場合での記述的自己開示と評価的自己開示それぞれ対応のない t 検定を行ったところ、KJ も、J も、有意差は見られず、内容の深さに関係なく自発的に開示する場合より相手に聞かれて開示する頻度が低いことが明らかになった。

最後に、記述的自己開示と評価的自己開示がどの開示状況開示をするか、KJ、J それぞれの、自発的に開示する場合の記述的自己開示と相手に質問されて自己開示をする場合の記述的自己開示、自発的に開示する場合の評価的自己開示と相手に質問されて開示をする場合の評価的自己開示の対応のある t 検定を行った。その結果、KJ の記述的自己開示 ($t(7) = 5.76, p < .10$) も J の記述的自己開示 ($t(7) = 6.72, p < .10$) も自発的に開示をしている傾向が見られた。同じく、KJ の評価的自己開示 ($t(7) = 6.35, p < .10$) も、J の評価的自己開示 ($t(7) = 5.92, p < .10$) も自発的に開示をする傾向が見られた。この結果から、KJ、J どちらも開示する内容の深さは関係なく自発的に開示することが分かった。しかし、どちらも有意傾向である反面、頻度の差から見ると、特に、主観的内容である評価的自己開示は自発的に開示した頻度が相手に聞かれて開示した頻度より KJ は 4.3 倍、J は 6.4 倍で、J の方が大いに差があると考えられる。J は、KJ に比べ、相手に考えや感情を開示する評価的自己開示は自発的には開示をしないようにしていると考えられる。しかし、その特徴が初対面の相手に対してのみ現れるものなのか、親密な友人関係においても現れるものなのかは分からない。

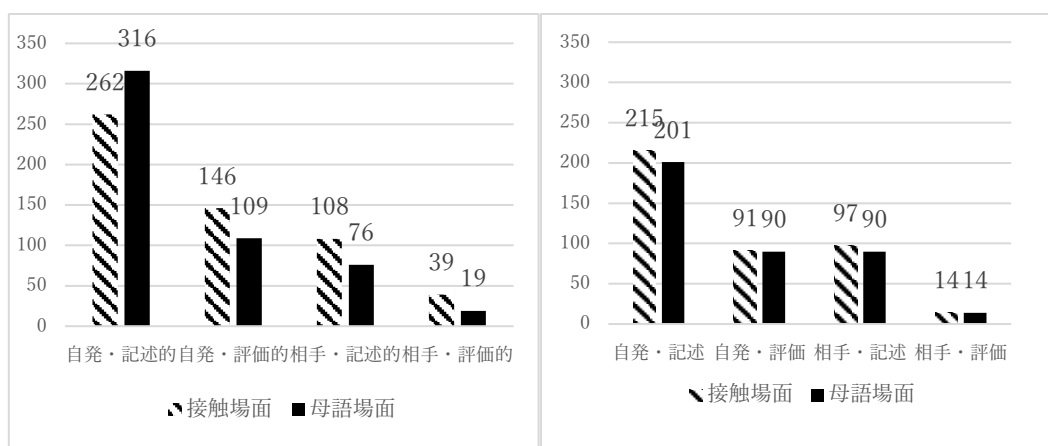
上記の結果から、自己開示の発話頻度の差は開示状況の差だけではなく、開示の内容によっても初対面の間柄では差が見られた。初対面の人との会話では相手に対する情報がないため、自分に関する属性や情報などを含む客観的内容を自発的に開示して、相手との距離を縮めて行くといえる。同じく主観的内容も、相手に聞かれて開示するより、自発的に開示し自己の感情や気持ちを開示し互いの距離を縮めて行くと考えられる。しかし、KJ は J より自発的に客観的内容も主観的内容も開示する傾向があり、特に主観的内容である評価的自己

¹¹ 本節での項目は、自発的にした開示の記述的自己開示、自発的に開示した評価的自己開示、相手からの質問によって開示した記述的自己開示、相手からの質問によって開示した評価的自己開示4項目1つ1つを示す。

開示において、その傾向が強いことが明らかになった。榎本（1997：93）は、相手が表面的な内容で自己開示をすると表面的な内容で返し、内面的な自己開示をすると内面的な自己開示をすると指摘している。しかし、KJは客観的な内容も主観的な内容もJに比べ自発的に開示する傾向があり、その特徴は、相手からの質問による時ではなく、自ら自発的に開示をする時に現れやすいことが明らかになった。

4.3 開示場面別結果

本節では、接触場面と母語場面の比較とKJとJの比較するため、まず、KJの自己開示の出現頻度からそれぞれの項目¹²を接触場面と母語場面で比較し、同じくJも項目ごとに比較、検討する。次に、KJとJを比較するためKJ対Jの接触場面¹³での項目ごとに検討した。図4¹⁴と図5¹⁵は、KJとJの開示状況をさらに内容の差から記述的开示と評価的开示に分け、接触場面と母語場面を比較した結果である。



【図4】KJの開示状況と内容別場面の差

【図5】Jの開示状況と内容別場面の差

まず、KJの出現頻度を場面ごとに比較するため、全ての項目を対応のあるt検定を行った。その結果、全ての項目において有意差は認められなかった。同じく、Jもすべての項目において接触場面と母語場面では有意差が認められなかった。項目による場面の差は、KJ

¹² 本節での項目は、注14にある①～④の一つ一つである。

¹³ KJ対Jの母語場面を検討していない理由は、本稿における母語場面はKJとJが対話しているのではないため比較に意味がないと判断した。

¹⁴ 図4では、斜線棒が接触場面、黒の棒が母語場面での一つの項目の結果である。そして、左のグラフから①自発的に自己開示をした場合の客観的内容の記述的自己開示②自発的に自己開示をした主観的内容である評価的自己開示③相手からの質問によって自己開示をした場合の客観的内容である記述的自己開示④相手からの質問によって自己開示をした主観的内容である評価的自己開示を表している。

¹⁵ 図5はJの結果であり、図4と同じ構成である。

も J も見られなかった。しかし、出現頻度から見ると、全ての項目において J には変化が見られない一方、KJ は場面と開示内容によって量の変化が見られた。つまり、KJ は場面によって自己開示の量が変わり、開示状況によっても変化があった。守崎・内藤（2007）は、日本人同士の方が外国人との間より返報性が高いことを指摘している。しかし、今回の調査で J は母語場面でも接触場面でも一定の開示量が現れた。つまり、J は開示の内容が客観的内容か主観的内容か、自発的に開示をするか相手からの質問によって開示をするかの影響は受けていないことが示された。

次に、全ての項目において、KJ 対 J の接触場面における対応のない t 検定を行った。その結果、接触場面では自発的に開示した評価的自己開示のみ ($t(14) = 2.07, p < .10$) 有意傾向であった。つまり、4.2 節でも述べたように、KJ は J より自発的に開示した評価的自己開示が多い傾向だったが、それを場面で分けてみると、接触場面で多く現れることが分かった。また、KJ と J の間で返報性が見られない項目としては自発的に開示した評価的自己開示のみであった。横田（1991）は、日本人同士に比べ、留学生と日本人学生との自己開示には相互性が見られないことから、親密化しにくいと指摘している。しかし、実際の会話からは、客観的な内容においては相互性が見られ、主観的な内容においては相互性が見られなかった。自己開示の相互性は、開示する状況や内容の深さによって変わることが伺える。

親しい間で多く現れる主観的内容である評価的自己開示は、相手との親密度によって変わる項目であると考えられる。日本語母語話者は人間関係において自他の感情の働きに敏感に気を配り（中山 1989 : 77）、自分の感情や考えなどをあまり開示しない傾向があることから、自発的に開示する状況で、評価的自己開示の項目だけが有意傾向であったと考えられる。

5. まとめと今後の課題

以上、韓国人日本語学習者と日本語母語話者の初対面の会話データを元に、自己開示の開示状況及び開示内容の差を検討した。

本研究の結果を研究課題ごとにまとめると以下のようである。

- (1) KJ と J は相手の質問による自己開示よりも自発的自己開示が多い。特に KJ は J よりも自発的に自己開示をする傾向がある。
- (2) KJ は J よりも客観的内容も主観的内容も自発的に開示をし、特に主観的内容において KJ と J の間に大きな差が見られた。
- (3) J は状況と場面の差に関係なく一定の量を開示し、KJ は状況と場面によって開示量に変化が見られた。

多くの研究から質問紙による調査が行われてきたが、実際の会話データを使用することで質問紙とは異なる結果と差が明らかになった。さらに、韓国人日本語学習者と日本語母語話者の特徴と共通点及び相違点を明らかにすることができたと言える。しかし、今回の結果のように、自発的に自己開示をした場合や相手に聞かれて自己開示をした場合といった状

況によっても差があり、どのような内容で開示したか、身的内容や心情に関わる深い内容でも差があり、場面においても開示する量が異なっていた。自己開示は相手と自分の情報を増やしつつ親密になるために行うものであり、相手に関心を示し、相手の領域へ近づこうとする行為であることは両言語とも共通している。しかし、相手に同程度の開示が返報されないことで誤解や失望感を生むことも考えられる。したがって、異文化間の接触場面では互いの言語文化の理解が重要であると考えられる。そして、異文化間の文化差を知ったうえで、初対面の間柄から良好な人間関係を構築していく必要があるだろう。

本研究では自己開示の開示状況と会話内容に焦点を当てて検討した。初期の段階から相手に対する印象は重要であり、今後維持するためには会話内容のみならず会話後の気持ちとの関連性を考えるのも重要だと考えられる。今後データを増やし、会話後の気持ちと自己開示の効果や印象の変化など、開示後の要因と開示量や内容の関連性を検討したい。そして、初対面の間の断片的な会話だけではなく、親密になる過程を数回にわたってデータを収集するなど縦断的な研究も必要と考えられる。

以上、今後の課題について述べたが、これらの研究を通して異文化間のコミュニケーションにおける差を明らかにし、接触場面における韓国人日本語学習者の特徴をさらに追及して行きたい。それによって、異文化間の会話における誤解や摩擦の原因が解明でき、日本語学習者が円滑なコミュニケーションを取れるようになることの一助となると考えられる。

【参考文献】

- 井出祥子(1998)「文化とコミュニケーション行動—日本語はいかに日本文化とかわるか—」『日本語学』 pp.63-77.
- 榎本博明(1997)『自己開示の心理学的研究』榎本博明編, くろしお出版
- 小川一美(2000)「初対面場面における二者間の発話量のつりあいと会話者及び会話に対する印象の関係」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 47』心理発達科学編, pp.173-183.
- 奥山洋子(2005)「韓・日同国人女子大学同士の初対面の会話—質問及び自己開示の時間帯による分析を中心に—」『社会言語科学 8』社会言語科学会編, pp.69-81.
- 加藤尚吾・加藤由樹・赤堀侃司(2006)「電子掲示板上のコミュニケーションにおける自己開示の返報性と感情的側面に関する分析」『日本社会情報学会学会誌 18』 pp.5-19.
- 熊野道子(2002)「自ら進んで自己開示する場合と尋ねられて自己開示する場合との相違」『教育心理学研究 50』 pp.456-464.
- 全鍾美(2010a)「初対面会話における韓国人日本語学習者の自己開示研究」『小出記念日本語教育研究会 18 (2)』 pp.5-21.
- 全鍾美(2010b)「初対面の相手に対する自己開示の日韓対照研究—内容の分類から見る自己開示の特徴—」『社会言語科学 13 (2)』 pp.123-135.
- 内藤伊都子(2011)「親密さの要因としての対人魅力、自己開示及び非言語行動—同性二者間による日本人の友人と異文化の友人の比較—」『ヒューマンコミュニケーション研究 39』pp.5-24.

- 中村陽吉(1990)『自己過程の社会心理学』中村陽吉編, 東京大学出版会
- 中山晶子(2003)『親しさのコミュニケーション』中山晶子編, くろしお出版
- 中山治(1989)「日本人のぼかしのコミュニケーション」『「ぼかし」の心理—人見知り親和型文化と日本人』中山治編, 創元社, pp.61-87.
- 西田司(1998)「初対面 30 分間の話題に見る日米自己開示」『異文化の人間関係 17』高賀出版, pp.39-54.
- 橋本進吉(1934)『新文典別記文語編』橋本進吉編, 富山房
- 深田博己(1998)「自己を知らせるコミュニケーション: 自己開示」『インターパーソナル・コミュニケーション—対人コミュニケーションの心理学』北大路書房, pp.82-103.
- 豊前貴子・大淵憲一・中村雅知(1990)「自己開示に関する研究—日本人大学生と留学生の比較—」『東北大学学生相談所紀要 17』 pp.43- 57.
- 守崎誠一・内藤伊都子(2007)「同性二者間に見られる自己開示の返報性—親密度と文化の影響」『異文化間教育 25』 pp.74-89.
- 横田雅弘(1991)「自己開示から見た留学生と日本人学生の友人関係」『一橋論叢』 pp.629-647.

Chen,Guo-ming(1995)Differences in self-disclosure patterns among Americans versus Chinese. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, pp.84-91.

Jourard,Sidney M.,&Lasa kow,Paul(1958)Some factors in self-disclosure.*Jornal of Abnormal and Social Psychology*,pp.92-98.

Morton,T.L(1978)*Intimacy and reciprocity of exchange.Journal of Personality&Social Psychology*,pp72-81.